希望新聞

東日本大震災希望新聞取材班
〒100－8051（住所不要）毎日新聞生活報道部
ファクス03・3212・5177
メールkibou@mainichi.co.jp

被災地に役立つ情報や「伝言板」への投稿をお待ちしています。被災者の今困っていることも募集します。投稿は、氏名、住所、年齢、職業、電話番号（あればメールアドレスも）を明記してください。

東日本大震災 サポート情報

28日現在

ボランティア

がれき処理作業での災害防止講習会 7月15日14～16時、大阪市中央区森ノ宮中央1の大阪中央労働基準監督署6階講堂。大阪労働局や大阪市などが、被災地のがれき処理にあたるボランティアに、災害防止対策や心構えを説明する。

7月から8月の夏休みにボランティアに参加する社会人や学生が対象。けがを防ぐ注意点や粉じん対策などを学べる。

先着100人で無料。住所と電話番号、氏名を記入し、ファクス（06・6949・6034）に申し込む。問い合わせは大阪労働局労働基準部安全課☎06・6949・6496。

労働・雇用

「出張労働相談」 岩手労働局は、交通インフラや通信機能が回復していない地域で「出張労働相談」を実施している。雇用保険や労災保険の給付、雇用の維持、未払い賃金の問題など労働に関するさまざまな相談を受ける。

毎週火曜日＝大槌町中央公民館（大槌町小鎚第32地割126）▽毎週水曜日＝山田町商工会（山田町長崎3の6の18）▽毎週木曜日＝陸前高田商工会役事務所（陸前高田市高田町鳴石50の47）。時間はいずれも11～15時。7月4日（月）は陸前高田市立米崎中学校（陸前高田市米崎町神田113）でも開催。10時～16時半。7月末までの実施が決定済み。問い合わせは岩手労働局総務部企画室☎019・604・3002。

奨学金

ローソンが応援基金設立 コンビニエンスストアを経営するローソンは、震災で就学が難しくなった生徒たちを支援する奨学金制度「夢を応援基金」を設立し、7月1日から受け付けを始める。

岩手、宮城、福島3県の高校生たちに、社会に出るまでの最長7年間、毎月3万円を給付する。返還義務はない。9月から給付を始める予定。

対象は高校、高等専門学校、高等専修学校に在学中か、12年に入学予定の生徒で、被災時に本人と保護者が被災3県に住み、同地区の学校に通学していた人。さらに①震災で保護者が死亡、行方不明、負傷、病気になったり、失業するなどして経済的に就学が困難な状況②震災で住宅が半焼、半壊、床上浸水以上の被害を受けたり、計画的避難区域になっている――のいずれかの条件を満たす生徒。

応募方法は学校やローソンのホームページで申請書を入手し、学校の担任教諭に提出。教諭や校長が推薦書を添えて同基金の事務局に郵送する。7月31日締め切り。

青年支援奨学金への寄付を募集 「東日本大震災被災青年支援奨学金基金の会」（鈴木綾・発起人代表）が、被災した青年の奨学金にあてるための寄付を募っている。寄付金全額を被災青年の奨学金に回し、運営費や経費は全額、発起人一同が負担する。

福島県会津地方に伝わる玩具「起き上がりこぼし」をモチーフに、基金の愛称を「OKIKOBO」とした。

給付対象は12年4月に大学や専門学校へ進学する意思を持ちながら、震災の影響で経済的に進学が難しい青年。在学中（最長4年間）、毎年30万～50万円を支給する。返済の必要はない。10月から公募を始める予定。

寄付の方法は同会のホームページhttp://www.okikobo.comで。

京都新宿区、木耐協は、不足している工具を被災地に送る「大工道具支援プロジェクト」を始めた。工具の提供希望者の登録を呼び掛けている。

木耐協によると「大工道具が津波で流されてしまい、復興しようにもできない」との声が寄せられ、使っていない工具を役立ててもらおうと企画した。

被災地で求められているのは充電式ドライバーや充電式丸のこ、発電機、コンプレッサーなど。これらを提供できる人は木耐協のホームページ（http://www.mokutaikyo.com/daiku/index.htm）で登録する。

現地のニーズと合えば、提供者から発送してもらう。「発電機など大型工具は特に足りないので、眠っているものがあったら協力してほしい」と話している。

■東北応援セレクトパック発売 JR東日本が、東北エリアの観光地や宿泊施設を応援しようと、自由度の高い旅行商品を28日発売した。

期間は7月1日～9月30日で、往復の新幹線と宿を自由に組み合わせることができる。行きの到着駅と帰りの出発駅は東北エリアの50駅から選べるほか、宿泊先も259施設から選択できる。

2連泊以上すると旅行代金が割引される利点も。1泊だけ宿泊施設を利用し、その他の期間は帰省先で過ごすなどのプランも可能。旅行期間は14日間まで延長できるので、長期滞在にも向いている。申し込みや問い合わせはJR各駅のびゅうプラザに。

ニーズ情報

被災者が求める物資や人的支援情報をお知らせします。必ず事前連絡をお願いします。

来月10日、支援バザー

■ふくふくプロジェクト
（福島市）☎024・502・6453
f-ssc@bz01.plala.or.jp
http://www.f-npo.jp/

復興支援バザーの物資提供を 「がんばろう福島！ 復興支援バザー」が7月10日10～12時、福島市渡利康善寺21の1、NPO「花見山を守る会」事務所で開かれる。市民が持ち寄った服や布団、カラーボックス、食器などを販売し、売上金全額を被災者への義援金にあてる。物資を提供できる人は、同NPOに事前連絡のうえ、前日までに発送するか持ち込む。問い合わせは同NPO（☎024・539・8908、高橋さん）へ。

■共同支援ネットワーク
（仙台市）
kyoudounet@gmail.com
http://www.clc-japan.com/jishin_b.html

扇風機や子ども用浴衣求む 仙台市や宮城県石巻市、気仙沼市の在宅被災者が、次のような生活物資を求めている。

蚊取り線香やリキッド式蚊取り器▽扇風機▽洗濯用洗剤や食器用洗剤▽食用油▽缶詰やレトルト食品（カレーや丼もの）などの保存食品▽子ども服や下着（80～130㌢）▽コーヒーメーカー▽ソート型パソコン。

また仙台市内の幼稚園の先生から、夏祭りのための子ども用浴衣（幼稚園児が着られるサイズ）の要望があった。共同支援ネットにメールで連絡を。

■遠野まごころネット
（岩手県遠野市）☎0198・62・1001
tonomagokoro@gmail.com
http://tonomagokoro.net/

メーク落としを 岩手県大槌町の避難所にいる被災者が、クレンジングオイルやシートタイプのメーク落としを求めている。化粧品の支援は増えたものの、メークは洗顔では落とせず、専用のオイルなどで落とす必要がある。「多くの女性が使うものなのに数が少ない」「落とさず寝ると肌に悪い」などの声が上がっている。

伝言板

▼運動靴と冷蔵庫送ります 埼玉県狭山市の小宮啓史さん(47)が、新品の小学生用運動靴48足と、中古の1ドアミニ冷蔵庫を送料を負担のうえ送ります。

運動靴は男女用が半分ずつで、サイズは18㌢、21㌢などです。段ボール3箱分を、被災地で希望者に配布してくれる団体などにまとめて送ります。

小学生用運動靴送ります

ミニ冷蔵庫（アビテラックス製、46㍑。幅45㌢、高さ51㌢、奥行き45㌢。冷凍室有り、取扱説明書付き）は1年ほど前に購入し、1カ月使用しました。

希望者は氏名、住所、連絡先を書いてファクス（042・958・7794）に連絡ください。

▼中古のピアノ、かぶと、ひな人形送ります 神奈川県大和市の田中公明さん(55)が、中古のアップライトピアノ、端午の節句用かぶと、ひな人形を、送料負担のうえ送ります。いずれも学校や保育所、公民館、福祉施設、飲食店など、多くの人が集う場所での活用を希望しています。

ピアノはウィスタリア製で、色はワインレッド。連弾できる長いすが付き。約20年前に購入し、10年ほど使いました。7、8年前に調律し、大きな傷はありません。設置や調律にかかる費用は負担してください。

かぶとは28年前に購入し数年飾りました。縦・横約30㌢、高さ20～30㌢の収納箱に入っており、弓と刀付き。タンスの上に飾れます。

ひな人形は25年前に購入し、数年飾りました。7段飾りですが、人形の高さが10～15㌢と小型の芥子（けし）びなので半畳分のスペースで飾れます。スチール製の飾り棚と人形、道具類がセットになっています。

希望者は氏名、住所、連絡先、希望理由を書いて、メール（works_tanaka@jcom.home.ne.jp）に連絡ください。

▼子ども服送りました 22日掲載で、もらい手を募集した子ども服などは、福島県双葉町から茨城県結城市に避難してきた塩谷おりさんらに送られました。塩谷さんは4月に男児を出産し、赤ちゃんの服が不足していました。提供した愛知県瀬戸市の加藤侑子さんは「機会があったら、またお役に立ちたいと思います」と話しています。

▼カトラリーの送り先、決まりました 横浜市の女性(47)が提供を申し出ていた未使用のステンレスのスプーン、フォーク、ナイフは、岩手県陸前高田市の女性に送ることになりました。津波で家財道具が流され、フォークやスプーンが数本しかないそうです。「カトラリー以外の物も送りたいと思います」

サインを集めて笑顔

福島 富岡町から郡山市のビッグパレットふくしまに

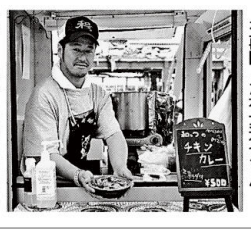
集めたサインを前に笑顔を見せる渡辺礼子さん

避難している渡辺礼子さん(57)「避難生活はつらいですが、有名人の方にサインをもらうのを励みにしています。以前、Jヴィレッジで働いていたので、サッカー選手にサインをもらおうと、車の中に色紙を用意していたことを思い出し、避難所に来る有名人の方からサインをもらい始めました。八代亜紀さんや川島なお美さんら14人のサインがあります。サインを壁に張って、殺風景な避難所を明るくしています」【松本惇】

声 被災者から

岩手

移動販売車を使って釜石市内で飲食店を再開した福士達也さん(38)「釜石市の呑ん兵衛横丁と大町で計6年、地鶏を名物にした居酒屋を営んでいたけど、津波で店は壊れ、包丁1本すら残らなかった。東京都内のNPOと市の協力を得て、昼にカレーを販売しています。5月に盛岡、釜石の若手料理人ら10人で岩手飲食業同志研究会を結成して、大槌町や山田町など復興のめどが立たない土地の料理人に調理道具を送っています。みんなで前を向いて頑張るしかないですね」【山田尚弘】



移動販売車を使い、飲食店を再開した福士達也さん

暑さで衛生状態心配

食中毒の防止策

手洗い励行／食べ物は直接触らない、長く保存しない

暑さが厳しくなり、被災地の衛生状態が悪くなっている。専門家は、避難所や仮設住宅での食中毒防止対策を改めて呼び掛けている。【下桐実雅子】

避難所の現状を把握するため、しばしば現地入りしている国立健康・栄養研究所の徳留信寛理事長は「高温多湿になり、イエバエがよく発生している。個人用の冷蔵庫がない避難所では、特に注意が必要」と話し、手洗い励行▽生食は避ける▽食べ物を常温で長く保存しない▽食べ残しは保存せずに捨てる――を徹底するよう訴える。食事や調理の前には、流水とせっけんで必ず手を洗う。水を豊富に使えない場合は、ウエットティッシュや手指用のアルコール消毒剤を使う。

食べ物は直接触らず、袋ごと持って食べる。「簡単なことだが、一番重要」という。缶詰などの加工食品は開封したら早めに食べることも大切だ。

下痢や吐き気のある人は調理を担当しない。おにぎりをつくる時には、ラップで握る。食料品は冷暗所で保管する。

十分な水分補給を

暑さ対策も重要だ。同研究所の笠岡宣代・食事摂取基準研究室長は「トイレが汚いと水分摂取を我慢してしまう人もいるが、この季節、脱水症状や熱中症予防のためにも、水分は十分にとってほしい」という。普段とっている水分の約半分は食品から摂取しており、食事が不足すると水分も不足しがちだ。

避難生活が長引き、被災者の体力が低下すると、食中毒も発生しやすい。

笠岡さんは「避難所ではおにぎりやパンなどの炭水化物が中心になり、たんぱく質やビタミン、ミネラル類が不足しがち。手軽に補給できる牛乳や野菜ジュースなども積極的にとってほしい」と呼び掛けている。

■被災地へボランティアに行くには■

各地の災害ボランティアセンター（VC）が被災地で活動するボランティアを募っている。電話で問い合わせる前に各サイトで情報の確認を。また、被災地に赴く前に居住地の社会福祉協議会でボランティア活動保険に加入することが望ましい。主なVC窓口は次の通り。

＜岩手県＞
県VCや各社協が内陸部に拠点を設け、沿岸部の被災地に送迎バスを出している。

◆県VC ☎019・637・7594 サイトでは個人参加できるボランティアバスの運行状況や各VCの募集情報を公開中

◆遠野市VC「遠野まごころネット」 ☎0198・62・1001 遠野市総合福祉センター発着便で沿岸部の被災地に毎日ボランティアを派遣。登録も随時受け付け。要事前申し込み。寝袋持参で体育館宿泊可

◆宮古市VC ☎090・4478・3984 個人、団体とも1週間前までに電話連絡を

◆陸前高田市VC ☎090・2852・9736 できるだけ2人以上で参加し、3日前までに連絡

◆大槌町社協VC ☎080・3518・8490 5人以上の団体で要事前登録。個人参加は県VCの盛岡発ボランティアバスを利用する

＜宮城県＞
各VCが県外からの個人ボランティアも受け付けている。詳細は各VCのサイトで。

◆仙台市VC ☎022・231・1326 5人以上での参加は先着50人まで、要事前申し込み

◆石巻市VC ☎0225・23・6015 10人以上の団体は要事前連絡

◆気仙沼市VC ☎080・5949・7475 10人以上の団体は3日前までに事前連絡

◆名取市VC ☎022・784・3029 団体は要事前問い合わせ

◆多賀城市VC ☎080・5949・7501

◆岩沼市VC ☎080・5949・7541 8人以上の団体は要事前申し込み

◆東松島市VC ☎0225・82・9812 車中泊スペースあり。土のう袋をなるべく持参。5人以上のグループは早めに事前申し込みを

◆亘理町VC ☎080・5949・7719 団体は要事前申し込み

◆山元町VC ☎080・5949・7720 要事前申し込み

◆七ケ浜町VC ☎090・6853・4490 団体は要事前申し込み

◆南三陸町VC ☎080・2055・1066 県内外問わず団体も受け入れ中

＜福島県＞

◆県VC ☎024・522・6540

◆相馬市VC ☎0244・36・7827

◆南相馬市VC ☎0244・24・1877 公式ホームページで活動内容や注意事項の確認を

◆新地町VC ☎0244・62・5577 要電話確認。毎週木曜は活動休止日。テント泊、車中泊は禁止

◆いわき市VC ☎0246・22・5501 団体は要事前申し込み

◆電◆話◆帳◆

●行方不明者・震災関連相談ダイヤル
岩手県警 0120・801・471
宮城県警 022・221・2000
福島県警 024・522・2151（内線3024）

●医療
文部科学省健康相談ホットライン・放射線関連 0120・755・199（9～18時）
放射線医学総合研究所相談窓口 043・290・4003（9～17時）

●生活支援
日弁連電話相談0120・366・556（平日10～15時）
岩手弁護士会 0120・755・745（月～土曜13～16時）
仙台弁護士会0120・216・151（平日10～19時）
福島県弁護士会024・534・1211（平日14～16時）
あしなが育英会 被災者専用 0120・77・8565（遺児らに特別奨学一時金を支給）
チャイルドライン 0120・99・7777（月～土16～21時、18歳までの子ども向け）
震災関連の悪質商法110番 0120・214・888（10～16時）

●省庁 ※平日のみ
公営住宅等情報センター 0120・297・722（9～18時。全国の公営住宅などを紹介）
住宅の補修・再建（国交省） 0120・330・712（月～土）
行政相談（東北管区行政評価局） 0120・511・556
金融相談（東北財務局） 022・721・7078
中小企業相談（経産省） 0570・064・350
農林水産業の被害相談（農水省） 0120・355・567
年金の相談（日本年金機構）0120・707・118※

●金融・保険 ※平日のみ
預金口座照会センター（全国銀行協会） 0120・751・557※
災害地域生保契約照会センター（生保協会） 0120・001・731※
そんがいほけん相談室（日本損保協会） 0120・107・808※
携帯・PHSからは03・3255・1306※

●移転した役所
＜岩手県＞
陸前高田市 高田町鳴石 0192・54・2111
釜石市 シープラザ釜石 0193・22・8253
大槌町 大槌小学校 0193・42・2111
＜宮城県＞
女川町 女川第二小学校 0225・54・3131
南三陸町 町総合体育館ベイサイドアリーナ南側テニスコートの仮庁舎 0226・46・2600

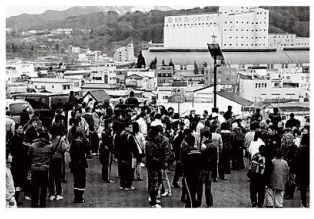
＜福島県＞
広野町 FDKモジュールシステムテクノロジーいわき工場 0246・43・1331
楢葉町 会津美里町本郷庁舎0242・56・2155
富岡町 郡山・ビッグパレット 0120・336・466
川内村 郡山・ビッグパレット 0120・38・2119
大熊町 会津若松市追手町第2庁舎0242・26・3844
双葉町 旧埼玉県立騎西高校0480・73・6880
浪江町 県男女共生センター（二本松市）コールセンター 03・5638・5055
飯舘村 福島市飯野支所内024・562・4200
葛尾村 旧法務局会津坂下出張所 0242・83・0271

★一時立ち入り受付センター0120・208・066 警戒区域9市町村への一時立ち入りを申し込める。8～20時

三陸物語 Sanriku Monogatari

ぼうぜんと廃虚をみつめる人々

視覚障害の兄妹 中村亮さん 三三子さん ❷



釜石市の高台にある寺の境内に避難した市民＝3月11日午後4時9分（菊地信平さん提供）

「向こう三軒両隣っていうじゃない。津波の時に頼れるのは、遠くの親類じゃなくて近くの他人よ」。岩手県釜石市の鍼灸師、中村亮（あきら）さん(57)と妹の三三子（みみこ）さん(55)の隣に住む女性(63)の言葉だ。他の「ご近所さん」と一緒に、目が不自由な兄妹の避難に手を貸した。

「津波が来たぞ！」。3月11日午後3時20分過ぎ、隣組の女性に手引きされて避難する兄妹の背後で、男性の切羽詰まった声がし、続いてビルの屋上に逃げた人々の叫び声が降り注いだ。「逃げろ！」「走れ！」。中村さんの頭には「死がよぎった」という。

なんとか逃げ延び、向かったのは中村治療院から5分足らずの小学校跡地。校庭には人の気配が充満していた。毛布1枚を手渡されて地べたに腰を下ろす。余震が続き、寒さも身に染みた。

そこで目と鼻の先の高台にある寺を目指したが、がれきで道がふさがれている。迂回（うかい）し、山道を30分近くかけて町を一望する寺の境内にやっとたどり着いた。

目の見えない中村さんの心に最も印象的に刻まれたのが、その時の情景だ。境内には当時200人近くが避難していたが「妙に静まり返り、ぼうぜんとして廃虚をみつめる人々の姿が浮かんだ」という。静寂の中でドラム缶のたき火がパチパチと音を立て、知人の男性のため息が耳に届いた。"ああ、おらほの家つぶれて、鉄筋の中村さんの家は残ってら"

日暮れとともに寒さが増し、一緒に避難したご近所さんに促されて寺に上がった。「見えない人いっから、部屋さ入れてもらうべ」と20畳ほどの部屋に案内される。

そこが、当面の中村兄妹の避難所になるのだが、2人にとっては未知の空間。「見える人が真っ暗な世界に放り出されたようなもの」だった。【萩尾信也】

◇

「三陸物語」は火～土曜日に掲載します。

ミニニュース

■大工道具を募集 全国の工務店などが加盟する「日本木造住宅耐震補強事業者協同組合」（東